ISSN 2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第67号 2020年7月15日

編集・発行『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人 冨岡勝・谷本宗生）
連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 冨岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 『日本諸学校に於ける佛教教育の現勢』の仏教系学校調査について	雨宮 和輝	2
逸話と世評で綴る女子教育史（67） ― 白蓮女学校→徳山女学校 ―	神辺 靖光	7
1940年7月の全国学生夏季合同合宿（菅平高原）の高揚 ― 参加体験談などから ―	谷本 宗生	10
明治後期に興った女子の専門学校（22） 唯一の女医養成機関 ― 東京女医学校草創期Ⅱ ―	長本 裕子	12
学校資料の教材化を模索して⑪ －「昔のアイロン」の活用を事例に－	八田 友和	16
カレッジノベルの研究への道（13） ：久米正雄「受験生の手記」（4）	吉野 剛弘	21
戦後生徒会活動成立史の研究 ⑬ ―「特別教育計画の組織と管理」以降（1）実践の動向 ―	猪股 大輝	25
「遠隔授業」準備メモ（4）	冨岡 勝	31
『久徴館』のめざすもの（4）	小宮山 道夫	36
体験的文献紹介(15) ― 拙著『東京における漢学塾の実態』の執筆をめぐって ―	神辺 靖光	39
刊行要項（2015年6月15日現在）		43
短評・文献紹介		44
会員消息		46

コラム
『日本諸学校に於ける佛教教育の現勢』の仏教系学校調査について

雨宮（あめみや） 和輝（かずき）
（早稲田大学）

新型コロナウィルスの影響で、図書館や大学で資料収集を行うのも困難な状況となっている。このような状況で過去に収集した資料を整理していた際に見つかったのが今回取り上げる『日本諸学校における佛教教育の現勢―仏教関係教育調査―』という資料であった。同書においては後述するように、当時の仏教系教育機関に関する調査が中心として記述されており、筆者の研究に関わる資料であるため、本コラムにて取り上げた。

まず『日本諸学校における佛教教育の現勢』を見てみると、同書の「緒言」には以下のように記載されている。

> 宗教々育研究の気運漸く盛んとなり、教育と宗教の関係が次第に明にされて来た。然れ共これが実施に関しては、種々困難を伴ひ、その実績については未だ疑問とされる點が尠くない。殊にかゝる実際の調査方面に関しては従来多く閑却され勝ちであつた[1]

以上のような状況を背景として、仏教主義の教育機関約 200 校を対象として調査した結果を掲載したのが同書であるとされている。また、同書には汎太平洋第二回佛教青年会大会開催記念して編纂されたと書かれている。では、汎太平洋仏教青年大会とはどのような行事であったのか。まず、汎太平洋仏教青年会大会について説明したい。

汎太平洋仏教青年会大会とは、1930 年代に入り、日本が国際社会の中で孤立していく中で、海外の仏教徒との交流及び布教の拡大を狙いとして開催されたものである。第一回の汎太平洋佛教青年大会は 1930 年にハワイで開催されている。『新仏教とは何であったか 近代仏教改革のゆくえ』によると「大会では第一部会で教育教化に関す

る議題、第二部会で思想問題に関する議題、第三部会で事業および経営に関する議題、第四部会で組織、制定に関する議題、第五部会では社会問題に関する議題」[2]が協議されたと述べられている。

そして、第二回汎太平洋佛教青年会大会は1934年に開催され、この大会では「日本、カナダ、南洋諸島、中国（中華民国）、セイロン、ビルマ、ハワイ、インド、満州、タイ（シャム）、シンガポール、米国」から代表者が参集し、日本側からも「各宗派の有力者を総動員した戦前最大の仏教徒の国際的イベントとなった」[3]と評している。そして、この第二回大会開催を記念して作成されたのが『日本諸学校に於ける佛教教育の現勢』なのである。つまり、記念的行事に際して仏教教育機関の調査が実施され、同書が作成されたのである。調査の項目を見てみると「一、大学・専門学校」「一、中学校・実業学校」「一、女学校」「一、専門道場・其ノ他」となっており、それぞれの学校の「教育方針」、そして、「宗教教育実施方法」という項目が調査対象となっている。以下、各教育機関の中でも大学、専門学校、そして、中学校について、調査内容であり教育方針と宗教教育の実施状況について見ていきたい。

まず「一、大学・専門学校」を見ると、この調査では龍谷大学、大谷大学、駒沢大学、東洋大学、立正大学、大正大学、高野山大学、そして、日本大学宗教科仏教部も「仏教主義の大学」として調査の対象となっている。そして、その後に大谷大学専門部、駒沢大学専門部、立正大学専門部、大正大学専門部が掲載されている。これらの大学及び専門部に関しては教育方針、宗教教育実施方法といった項目が記載されているのだが、教育方針は各大学同様のものであり、宗教教育実施方法についても詳細には記載されていない、大学では基本的に教学研究が中心であり、直接的な宗教教育は行われていなかった状況であったと窺うことができる。

次に、専門学校については大学よりも詳細に宗教教育の内容も記載されている。例えば浄土宗の仏教専門学校（現在の仏教大学）の宗教教育実施方法は以下のようになっている。

宗乗及方式伝道ノ特別教室ヲ設ケテ特種ノ注意ヲ払ハシメ朝夕ノ励行ヲ行ヒ職員生徒共ニ出デゝ食堂ニ作法シ生徒ノ努力ニ依リテ内外ハ清潔ヲ保チ特ニ寮舎ヲ設ケテ施シ毎月二十五日宗祖ノ御忌日ニ知恩院ヘ参拝シ別時会ヲ修シ其他宗教的行事ヲ励行ス[4]

このように、「宗乗及方式伝道ノ特別教室」を設け、毎月 25 日には浄土宗の総本山である知恩院に参拝させるといったように、宗教的儀礼が学校教育、行事に組み込まれていたことがわかる。また、調査は女子専門学校も対象とされており、女子専門学校の実態も示されている。女子専門学校に関しては、教育方針に関して、その独自性が見て取れる。例えば、千代田女子専門学校（現在の武蔵野大学）の教育方針を見ると「専門学校令ニ依ツテ女子ニ適切ナル高等ノ学術技芸ヲ教授シ其人格ヲ陶冶スルニアリ、其精神教育ハ仏教主義ニ依ツテ行フモ特色トシ、朗ラカニシテ而モ謙譲ナル女性ヲ教養スルニアリ」[5] となっており、相愛女子専門学校（現在の相愛大学）の教育方針を見ると「穏健ナル思志ヲ持チ人格ヲ完成シ宗教的信念ヲ以テ人世ヲ正視達観シツツ自信ヲモツテ一家一国ノ重キニ任シ得ル現代女子ヲ養成スル教育方針トス」[6] となっている。同じ仏教専門学校であっても養成する女性像に違いが存在するのは、宗派の女子教育に対する姿勢の違いから生じるものであると考えられる。このように専門学校においては各仏教系学校が宗教教育を学校教育の中に位置付け、教育方針においても宗派の考えが現れていたことが分かる。

そして、中学校は、さらに詳細に宗教教育の実施状況が示されている。例えば、真言宗が母体となる各中学校の宗教教育実施状況を見てみると以下のようになっている。

智山中学校：徳育ハ仏教主義ニ依リ校長訓話、講話等ニ依リ宗

教的素地ノ培養ニカム[7]

豊山中学校：一、各科授業時間中機会アル毎ニ宗教的訓練ヲ行フ

二、生徒訓練ノ基調ヲ大乗仏教ノ実践ニ置ク

三、仏祖諸星ノ記念日ヲ学校行事中ニ加ヘ信仰実践指導ヲ行フ[8]

高野山中学校：毎月二十日ニハ廟参ヲ又山内ニ於ケル各種法要ニ参列シテ実習ニ資スルノ外兼テ信仰生活ノ実ヲ挙ゲン事ニ努メツゝアリ[9]

以上の中学校の宗教教育実施状況を見ると、校長の訓話などによって仏教的素養を養成する、あるいは、専門学校と同様に学校行事の中に宗教的儀礼を組み込むといった形で仏教教育を実施していたことがわかる。また豊山中学校の状況にあるように「各科授業時間中機会アル毎ニ宗教的訓練ヲ行フ」といった部分を見ると、通常の授業時間中にも機会があれば宗教的訓練を実施していたとされる状況を窺うことができると言える。

このように、『日本諸学校に於ける仏教教育の現勢 ―仏教関係教育調査―』において実施された教育調査に焦点を当てて分析した。筆者の研究対象である大学に関しては、宗教教育の実施状況が概要的なものとして示されていたが、専門学校は大学よりも明確に宗教教育の実態状況が示されていた。この背景には学校での宗教教育の禁止を定めた訓令 12 号の影響が背景にあったと考えられる。訓令 12 号では専門学校は規制対象とされていなかったために自由な宗教教育ができたと考えられる。ただ、中学校においても詳細に宗教教育の内容が示されていたのは意外であった。むしろ、大学と同様に訓令 12 号の対象である中学校では実際に宗教教育が実施できていたのか、また、宗教教育が実施できていた場合、政府は仏教系中学校をどのように見ていていたのかという点は疑問である[10]。本コラムにて対象とした

資料は筆者の現在の研究とは対象は異なるが関連する内容であると言える。今回取り扱った内容については今後も引き続き調査し、コロナ騒動が落ち着いた際にはさらなる調査を行いたいと考える。

注

[1] 全日本仏教青年会連盟『日本諸学校に於ける仏教教育の現勢 ―仏教関係教育調査―』(1934 年)1 頁。

[2] 中西直樹『新仏教とは何であったか 近代仏教改革のゆくえ』(法蔵館、2018 年)262 頁。

[3] 中西直樹『同上』262 頁。

[4] 全日本仏教青年会連盟『同上』18 頁。

[5] 全日本仏教青年会連盟『同上』19 頁。

[6] 全日本仏教青年会連盟『同上』19 頁。

[7] 全日本仏教青年会連盟『同上』21 頁。

[8] 全日本仏教青年会連盟『同上』21 頁。

[9] 全日本仏教青年会連盟『同上』22 頁。

[10]「一般ノ教育ヲシテ宗教以外ニ特立セシムル件」(文部省訓令第12 号)では「官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施ス又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ」と規定されており、学科課程に関して法令の規定がある中学校での仏教教育が、実際に実施できていたのか、また、教育の中でどのような位置付けであったのかは、今後の研究で明らかにしたい点である。

＊このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（67）

―白蓮女学校→徳山女学校―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

これからしばらく仏教系の女学校のことを書こうと思う。前（さき）に本シリーズ（62）で書いたが、明治初年の廃仏毀釈で還俗（げんぞく）する坊主も多く、仏教各派の統制も崩れて布教活動も弱まった。しかし、これを機に反省し決起する僧侶もあり、各派各様に新時代に対応できる僧侶養成に努力し、やがて各派の中学校や大学の設置が展望できるようになった。しかしながら、女学校の創設までは明治前期には考えるには至らなかったのである。

明治20年、山口県徳山の徳応寺の門前に白蓮（びゃくれん）女学校が誕生した。設立者は真宗本願寺派の僧侶・赤松照憧（あかまつしょうどう）と妻安子である。赤松照憧は徳応寺の住職・赤松連城（れんじょう）の養子で安子は連城の娘であった。赤松連城といえば、真宗本願寺の改革者で東京に千代田女学校をつくった島地黙雷（もくらい）と並ぶ双璧である。ここで真宗本願寺派と明治の改革について簡単に述べておこう。

浄土真宗は鎌倉時代のはじめ浄土宗の開祖法然の弟子・親鸞がはじめた新仏教である。本願寺第八世蓮如（せいれんにょ）の時、教勢が拡大して全国に及んだ。江戸時代初期、本願寺が東西に分派した。東本願寺に拠った大谷派に対し、西本願寺を本山とするものを本願寺派と言った。明治5年、浄土真宗は真宗と称する。さて明治初年の仏教改革である。各派それぞれ改革するが真宗本願寺派の改革は目を見張らせた。5人の秀才僧侶を欧米に派遣したのである。『明治事物起源』は「名僧知識の唐土に渡航して、その教法を研究したるは弘法、伝教大師等古例はなはだ多し、しかれども教法視察の目的をもって欧米諸国に渡航したるは本願寺派の五僧をもって嚆矢とすべし」として赤松連城、島地黙雷を含む5名の僧侶をあげ、「この五氏は五年正月廿六日の郵便船にて横浜を発し欧米諸国を巡視し外教の真理を研磨せり」（石井研堂『明治事物起源・宗教部』）と記している。大谷派の清沢満之（まんし）も東京大学で西洋哲学を学び、それによって新しい仏教

哲学をつくろうとしているから真宗は他の仏教諸派と違ったところがある。南部六宗をはじめ天台・真言の旧仏教は改革のいとぐちを古典的経典の検討からはじめている。明治最初年の王政復古と同様、改革の方向がまちがっているようであった。

赤松照憧は京都府与謝郡で生まれた。弟は歌人与謝野鉄幹である。照憧は赤松連城に迎えられてその養子になったのである。妻の安子は赤松連城の娘、幼少の頃から漢学を学び絵や琴・三味線を教え込まれた。明治13年、20歳で京都府立女学校を首席の成績で卒業し明治19年、照憧と結婚して徳山に帰った。

帰郷するや早々、二人は父連城の徳応寺の本堂で徳山婦人講習会なるものをはじめた。女性の信者を多く持つ浄土宗や真宗は江戸時代から講という今日で言えば教養講座のようなものを各地で行っていた。（斎藤明俊『近代仏教教育史』）。徳応寺本堂ではじめた婦人講習会はそれを発展させたようなものとも思われるが、さらに国語、算数、歴史、裁縫、家政などの教科も教えた。新時代の京都府立女学校を首席で卒業した赤松安子がそうさせたのであろう。評判がたって生徒が集まりだしたので明治20年、白蓮（びゃくれん）女学校と名乗った。中国の念仏結社・白蓮社からとった名であろう。常勤の生徒が30名程になり、さらに殖え続けたので明治23年、徳応寺の門前に校舎を新築して徳山女学校と改称した。校主・赤松照憧、幹事・赤松安子であるが、校務一切は安子が見たようである。本科3年、選科2年で講習会から引き続いて国語、算数、歴史などの普通科に裁縫、家政であるが、徳山女学校になってからは英語を加えた。国語、算数、歴史、英語などの普通科は赤松照憧、安子夫妻のほかに照憧の弟、与謝野寛（鉄幹）が加わって教え、裁縫は近所の裁縫師匠が教えた。

授業料その他学校収入についてのことはわからない。赤松連城の徳応寺の全面的なバックアップによってなりたっていたのであろう。照憧・安子夫妻は徳山女学校を経営するかたわら防長婦人相愛会を與し、慈善事業に乗り出した。24年から相愛会の慈善市を毎年開催し、32年には育児所を徳応寺内に設置して女囚の乳児保育をおこなった。その際、女学校の生徒たちも交替で乳児保育を手

伝った。36年には附属農園を設けた。そしてここでとれた草花や野菜の慈善行商をするのも女学校生徒の役目であった。まさに実践的勤労教育を行ったのである。37年には女学校に養蚕、染色、機業の実習科を附設している。

こうして明治20年、山陽道の一小都市にはじまった最初の仏教系女学校は地域の信徒とともに少しずつ地域の人々を巻き込んで教育活動を拡げていったのである。仏教の慈悲心が活動の根底にあったからであろう。徳山女学校は明治の終りまで地域で知られた存在であった。しかし、大正２（1913）年、赤松安子の死をもってその活動が止まり、人々の記憶から遠ざかっていった。

参考文献

平塚益徳『人物を中心とした女子教育史』
斎藤昭俊『近代仏教教育史』

1940年7月の全国学生夏季合同合宿（菅平高原）の高揚

― 参加体験談などから ―

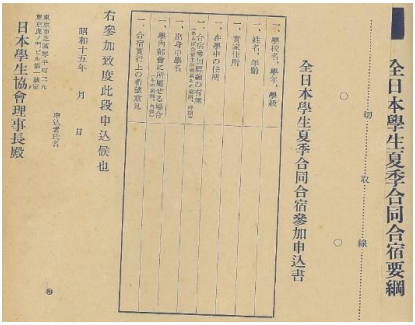
谷本（たにもと） 宗生（むねお）（大東文化大学）

本稿では、1940年7月に日本学生協会（1940年5月設立）が主催した、全国学生夏季合同合宿（菅平高原・9泊10日）の高揚について、日本学生協会が発行する雑誌『学生生活』に掲載されている参加学生の体験談などから紹介してみたいと思う。このたび、同上雑誌の原物数点を幸いにもネット古書店（泰成堂書店：東京都武蔵野市）にて、安価に入手できた次第である。日本学生協会とは、近衛文麿や勝田主計、平尾釟三郎や吉田熊次らを顧問として、田所廣泰（理事長）や小田村寅二郎（幹事）らが「全国高等専門学校生徒大学学生相互間の精神的交流及学術的協力を図る」ことを目的として組織し、そのための合同合宿や講演会などの開催、学生生活に関する図書・雑誌の刊行などを主な事業として行っている。日本学生協会の式典歌『神州不滅』や行進曲「進めこのみち」とも、三井甲之が作詞、信時潔が作曲している。『学生生活』7月号（1940年）の「編集後記」には、「歌へば歌ふ程よくなる歌でありました。合同合宿に於て全国の同信諸兄と合唱する時こそ思ふだに感激せしめられます」と記されている（井上義和『日本主義と東京大学』2008年、等参照）。

1940年7月の夏季合同合宿は、「全日本学生層に対し失はれたる一体感を蘇らしめ、正しき日本学に立脚せる綜合的思想修練をなす」を目的として、参加学校は84校、総計391人が参加したものである。参加校のなかでも、早稲田大学、新潟高校、佐賀高校、山口高商、福島高商、東京帝大、國學院大学、関西学院から多数の学生らが合宿に集っている。興味深い点としては、合宿費では1日1円を各自が負担しながらも、旅費については、各校所在地より（台湾は鹿児島より、朝鮮京城以北、満州は京城より）合宿地までの往復旅費を日本学生協会から支給したのである。合同合宿では、参加学生らは20班ごとに分かれて朝から晩まで寝食をともにし（午前5時起床・午後9時半就寝）、「青年よ自覚せよ民族性格創造の唯一責任者たることを」スローガンに、勉学や討論などにいそしん

だのである。「菅平合同合宿報告」によれば、第9日目の7月24日には、日比谷公会堂にて「全国学生合同合宿報告大講演会」を開催し、「三千を収容し得る会場は満場既に立錐の余地もなく、尚も後続する聴衆の姿は外廊に溢れていた」という。日本学生協会の田所理事長も、「時代は遂に我ら青年の肩に！ 後続部隊は我らの背後に澎湃としてひかへてをる。我らはその前哨部隊だ。我らは全日本青年の意志を代表し、時代の魂をゆりうごかし祖国生命を恢復せしめずんばやまぬのだ。学生協会の出現は既に現代教育界最大の問題であつた」と、自信をもって講演会を結んでいる。

合同合宿に参加した学生の勝田礼之（佐賀高校）は、「青年が青年を教育する新しき指導者教育、それは嘗て何人によつても試みられた事のないものであつた。而も僅か一週間の訓練により三百名もの学生が皆異口同音に、今迄の学校教育に於て嘗て経験しなかつた事を経験したと言葉にあふるるばかりの感激を以て体験を告白し、従来の学校生活に於て皆無であつた所の、人生観の問題、民族国家の問題等々が、お互の体験告白により十年の知己の如く、又兄弟の様な親しみを感じ合つているなごやかな空気の中に、真剣に討論されたのであった」と述べている。また同じく参加学生の板巻啓睦（早稲田大学）も、「小生も真に自己の存在価値、自己の真生命を日本民族永久の生命の中に見出す事が出来、過去の客観的見方より生じた価値無き悪夢も、混沌たる精神も全く自己を全体から切り離さず、個人を全体に没入させ、全体的な一つのものに個人を帰一する事によつて全く拭ひ去られました」と、感謝の意を表している。


全日本學生夏季合同合宿要綱

一、期日　七月一日～一週間

一、場所　菅平

一、集合場所

一、参加者の資格

一、合宿中の生活

一、出発の準備

一、學生協會主催の合宿

一、合宿費及上の必要事項

右參加致度此段申込候也

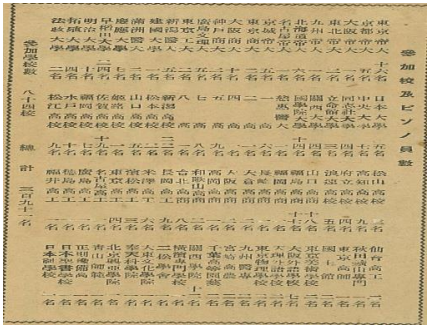
昭和十五年　月　日

東京都千代田区一ツ橋二ノ一
東京高等師範學校内
日本學生協會理事長殿

全日本學生夏季合同合宿參加申込書

夏季合同合宿参加申込書

（『学生生活』6月号、1940年所収）


參加校及ビソノ員數

合同合宿参加校の内訳

（『学生生活』9・10月号、同年）

明治後期に興った女子の専門学校（22）

唯一の女医養成機関――東京女医学校草創期Ⅱ

長本（ながもと） 裕子（ゆうこ）(ニューズレター同人)

明治30年代の女医養成機関はどのようになっていたか見てみよう。34年3月、済生学舎から締め出された25名ほどの後期生（医術開業試験前期試験合格者）は、本郷の中央会堂を借りて、済生学舎のこれまでの講師に嘆願して講習会を持った。2年ほど続き、医術開業試験の合格者が出たあと自然消滅した。前期生の女子50名は、3人の委員を選び、石川清忠ら数名の済生学舎の講師と交渉し、神田三崎町にある東京歯科医学校の校舎を借りて、「女子医学研修所」を創立した。30人くらいの学生を集めれば講義をしてもよいという条件付きであった。済生学舎の学生15名が集まった。あと15名を集めなければならなかった。34年4月、東京女医学校は、済生学舎から移ってきた学生などで20名ほどになった。ところがまもなく3人、5人と姿を消していった。おかしいと思いながら様子を見ていると、女子医学研修所の学生たちが、東京女医学校の門前で学生を待ち伏せして、研修所と女医学校の優劣や、講師の学歴の違いなどを説いて勧誘し、連れ去っていたのである。吉岡弥生は、二つの学校で学生を取り合うことを避けるため、合同にすることを申し入れたが断られた。研修所の当事者は「お前の力でやれるものならやってみろ」というような馬鹿にした態度であった。弥生は悔しかったが、東京女医学校を必ず立派にしてみせると奮い立った。そして、女子医学研修所は3年経たないうちに維持できなくなり、36年ごろには廃止され、学生は石川清忠校長の東京医学校に収容された。

36年9月、丸茂文良が下谷の病院を改造して「医学温習会」を開き、数名の女子学生が通っていたが、丸茂が病没したため3年で消滅した。36年8月、済生学舎が廃止され、その学生救済のために、37年4月、神田淡路町に「日本医学校」が創設された。そこに20名ほどの女子学生が通っていた。43年日本医学校が石川の東京医学校を合併し、しばらく男女共学が続いていた。しかし、44年日

本医学校が専門学校に昇格するとき、女子学生がいては邪魔になるといって女子の入学を拒絶した。女子学生は再び締め出されてしまった。

関西方面では、28年創立の緒方正清の「大阪慈恵医院医学校」が男女共学をとり、唯一の女医養成機関となっていたが、経営困難のため廃校となり、35年設立された佐多愛彦の「関西医学院」に引き継がれた。しかし、ここも41年に閉鎖されたため、女子学生は上京して、日本医学校か東京女医学校に転じた。

これらのことからも費用がかさむ医学校の経営は並大抵のものではないことがわかる。結局最後まで女医養成機関として残ったのは東京女医学校だけであった。採算が取れるか取れないかなどということは度外視して、ひたすら日本の女医の伝統を絶やさないためにという弥生の情熱と荒太の内助があったからこそ継続できたのである。

とはいうものの、六畳一間では学校の体裁をなさないので、34年5月、牛込区市ヶ谷仲之町に元政治家が住んでいた屋敷が空いていたので移転した。2階が8畳と6畳で、中の仕切りを取れば一つの教室として使えた。1階は玄関が2畳、8畳と6畳を寄宿舎にあてた。別に5室の平屋建がついていたので、弥生夫妻の部屋と寄宿舎の食堂と炊事場にした。いくぶん学校らしくなったが、家賃がかさみ、弥生は郷里の父に出資を願い出てなんとかその年を越した。翌35年春、郷里から父親の使いとして親戚の者が3人上京した。3人は、弥生に学校の経営をやめて、郷里へ帰って開業するように説得した。しかし、弥生は「私は死んでも、この学校をやめません」と言って、郷里に帰る意志がないことをきっぱりと表明した。日本の女医の将来のために建てた学校だという理想を捨てなかった。

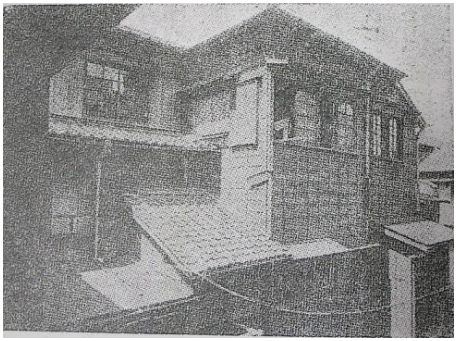
このような困難が続く中で、35年6月29日、弥生は長男博人を出産した。その出産の場を学生の勉強のために提供した。東京女医学校の医術開業試験合格第1号の竹内茂代は次のように語っている。

> 先生は、生徒の皆に、自分のお産を見なさいというんです。室の外から二十人ほどが折り重なって見ていました。陣痛のたびに、ソラ来たッ、とおどけた

声をかけなさるんです。…二十時間くらいかかりましたね。三十二歳で、初産で、生徒の実験台になって…（『日本女医史』追補）

まさに一身をかけての弥生の指導は、学生たちにとって貴重な体験となり、大きな感動を与えたことだろう。

博人誕生後、弥生は神田飯田町の至誠医院に移り、荒太が学校の教授兼寄宿舎の舎監として市ヶ谷仲之町に泊まり込んだ。約1年後、夜、弥生と学生たちが散歩中、河田町の月桂寺の隣地に木造洋館の建物が空いているのを見つけ、学生たちに強く懇願されて購入することになった。その建物は1,200円で売りに出ており、900円の抵当に入っていた。その抵当を引き継げば差額の300円で入手できた。しかし、200円しか準備できず、不足額は高利貸から借りた。36年3月、牛込区河田町6番地の陸軍獣医学校跡へ移転した。これが現在の東京女子医科大学の敷地に結びつくのである。建物の全部を学校のものにするのに数年かかった。



明治 37 年建築の寄宿舎兼診療所
『吉岡弥生伝』より

校舎の悩みは解決したものの、学校の内容や設備は相変わらず貧弱であった。頭蓋骨の標本1、顕微鏡1、試験管が10数本という程度で、解剖の道具も材料もなかったため、裏庭の蛙をつかまえて張板を出して、持ち合わせのナイフで解剖実習を行ったり、道端に捨てられた犬や猫の死骸を拾ってきて解剖したりした。「女医学校の生徒を見たら、犬も猫もつないでおけ」という噂が近所に立ったほどだ。懇意な人の中にはそんな実習用の材料を土産がわりに持ってきてくれることもあった。

寄宿舎はまだ市ヶ谷仲之町にあったため、河田町の学校内に設けるために、学生が中心となって、創立3周年記念の音楽会と講演会を開き、その収益で寄

宿舎を建築しようということになった。学生総勢36名が連署した趣意書を作り、入場券を手分けして売りさばいた。病院や同業者の医者はほとんど買ってくれなかった。“そんな山師の学校なんか、さっぱりやめて、田舎へ帰ってお嫁にでも行った方が身のためだよ”などと悪口を言われることもあった。むしろ大会社や有力団体がよく買ってくれた。1,200枚を完売し、会場の中央会堂が昼夜2回満員になった。400円の収益をあげることができた。1階を診療所にあて、2階の6畳と8畳の10室ほどを寄宿舎にした。これを東寮とし、37年6月、仲之町の寮から引っ越した。こうして、37年9月1日、河田町に東京至誠医院の看板を掲げた。付属病院の出発であった。

診療所を設置したことで、臨床講義が受けられ、患者とも親しく接することができるようになった。38年には寄宿舎の西寮が出来て移り、東寮のあとを病室とし、手術室、薬局を設けた。入院患者を扱うようになり、学生も学業の間に、看護婦、小使、薬局生、会計、受付として働いた。教師と学生が一体となって、涙ぐましい努力の末、少しずつ学校らしく、病院らしく体裁を整えていった草創期であった。

37年11月3日、一般世人の社会衛生思想を普及し、女医の必要性を認識させるために雑誌『女医界』を創刊した。

参考文献

『東京女子医科大学小史』―六十五年の歩み　三上昭美著

『吉岡弥生伝』吉岡弥生女史伝記編纂委員会編集

『日本女医史』追補　日本女医史編集委員会

『日本医科大学の歴史』

学校資料の教材化を模索して⑪

ー「昔のアイロン」の活用を事例にー

はった ともかず
八田 友和（クラーク記念国際高等学校）

1. はじめに

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説ー社会編ー』（以下、『指導要領ー社会編ー』）の“第3学年の目標及び内容”において、“市の様子の移り変わりについて、学習の問題を追究・解決する活動”を通して、「（ア）市や人々の生活の様子は、時間の経過に伴い、移り変わってきたことを理解すること。」「（イ）聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめること」が求められている。[1)]

以上を受け本稿では、『指導要領ー社会編ー』の（ア）（イ）の理解を目指した、学校資料の活用として、アイロンを取り上げた授業モデルについて整理・提示を行う。

2. 教材としてのアイロン

ここでは、アイロンや昔の生活用品を授業で活用する方法を紹介する。まず、製作された時期がバラバラな複数のアイロンを準備して、時系列に並べる活動を組み込む[2)]。その際、何をヒントに並び替えたのか発表させ、道具の変化を視覚的に理解させる。また、道具を通して、使用された当時のくらしの様子を調べるためには、資料ごとに「資料メモ」[3)]をとる学習を組み込むことが有効な方策になると思われる（資料メモには、「道具の名前、使い方、使用されていた時代、くらしのようす」などをまとめる必要がある）。そして最後に、調べた情報を、自分たちの住んでいる市町村のくらしと出来事を関連させて、一つの年表にまとめる。

3. 授業内容

時間	学習内容	生徒の活動 （○発問・指示、・予想される回答）	教師の指導・留意点
導入	1. めあての確認	○（各種アイロンを提示しながら） 今日はアイロンを通して、くらしの変化や技術の発達を調べていく旨を伝える。	めあてを設定することで、本時の到達点を確認する。
展開	2. 資料の並び替え	○使用されたものが古い順番からアイロンを並び替えてみよう。※ 【炭火アイロン】【最新のアイロン】 【昔の電気アイロン２種類】	アイロンを年代順に並び替えさせることで、道具の変化を視覚的に理解できるようにする。
	3. 資料の比較	○何をヒントに並び替えましたか ・見た目、機能、重さなど	
	4. 調べ学習	○それぞれのアイロンの使い方を「使い方カード（道具の名前、使い方、使用されていた時代、くらしのようすの４項目）」にまとめよう。 （使い方カードは次頁参照）	アイロンの使用方法をカードにまとめさせることで、道具の発展だけでなく、その背景となった社会情勢についても気付かせる。
		くらしの変化と技術の発展についてまとめよう！	
	5. 年表の作成	○市町村のくらしと出来事について調べて、年表にまとめよう。 ・自分たちの都道府県、市町村の動きと当時のくらしの様子１枚の年表にまとめる。 ○調べたことを年表にまとめてみよう！	調べ学習については、地域の人へのインタビュー調査なども想定される。
まとめ	6. 本時のまとめ	○今日の授業で学んだことをノートにまとめて提出しよう！	学んだことを具体的に書くように指導する。

※アイロン４種が準備できない場合は、実物資料と写真資料を準備する。

使い方カード

年　組　氏名：

1．道具の名前：

2．使い方：

3．使用されていた時代：

4．くらしのようす

（出典）『新編 新しい社会３・４上』（東京書籍）を参考に筆者作成

4. 考察

本研究の成果として二点挙げられる。

第一に、実物資料（アイロン）を使用された年代順に並び替える活動を組み込むことで、道具の形や機能が変化する様子を視覚的に理解することが目指せた点である。加えて、アイロンの使用方法を「使い方カード」にまとめさせることで、道具の発展その背景となった社会情勢についての理解も目指すことができる。

第二に、学習過程に地域の人たちへのインタビュー調査や、年表にまとめる活動を組み込むことで、主体的・対話的で深い学び（以下、アクティブ・ラーニング）を意識した指導案作成につながった点である。今後、勤務校で実践を行い有効性等の検証を行いたい。

5. おわりに

本稿では、学校資料を用いた授業開発として、アイロンを用いた授業モデルの紹介を行った。具体的には、アイロンを年代順に並び替える活動やアクティブ・ラーニングにつながる学習過程を組み込んだ授業モデルの紹介を行った。

授業における実物資料の活用を考える際、博物館の利用・活用が有効な方策になる。特に、本稿で扱った単元については、“特別展　昔の道具学習”といった名目で、毎年多くの博物館が特別展を開催する。特別展を行っている博物館や資料館を調べたうえで「博物館を見学したい！」「学校に来てほしい！」という質問を博物館や資料館に行うことで、学習活動の幅や質の向上に繋がると思われる。

なお本稿は、『みんなで活かせる！学校資料』（村野正景・和崎光太郎編）に掲載した指導案等に加筆・修正を行ったものである。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、滋賀県文化財保護協会の鈴木康二氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

【註】

1）『指導要領－社会編－』p.44 を参照。

2）資料をあつめることが困難な場合は、写真資料で代用することや、一部資料のみ用意し、残りの資料を写真資料で代用することなどが想定される。

3）資料メモ作成のために、祖父母や地域の方々にインタビューを行うことでより現実味のあるメモが完成すると思われる。

【参考文献】

・村野正景・和崎光太郎（編）2019『みんなで活かせる！学校資料－学校資料活用ハンドブック－』学校資料研究会

・島田雄介・神野晋作・八田友和　2018「学校所在資料の活用～学校現場に聴

く～」『考古学研究』第 64 巻 3 号，pp.10-19
・クラーク記念国際高等学校芦屋キャンパス「実践現代社会」受講者 2020『思い出博物館常設展示図録－昭和懐かし館』
・文部科学省 2019『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説－地理歴史編－』東洋館出版社
・金沢くらしの博物館ホームページ（最終確認 2020 年 7 月 5 日）
https://www.kanazawa-museum.jp/minzoku/
・東芝未来科学館ホームページ「日本初の電気アイロン」
（最終確認 2020 年 7 月 5 日）
https://toshiba-mirai-kagakukan.jp/learn/history/ichigoki/1915iron/index_j.htm

カレッジノベルの研究への道（13）
：久米正雄「受験生の手記」（4）

吉野（よしの） 剛弘（たけひろ）（埼玉学園大学）

今号では、前号に引き続いて久米正雄の「受験生の手記」について検討する。

今号で検討の対象とするのは、出来のよい受験生の描写である。この小説に登場する受験生は、お世辞にも出来がよくない。それは前号で見た健吉本人と文科志望の佐々木もそうだし、第 62 号で見た「都落ち」する隣室の松井もそうである。この小説に登場する出来のよい受験生、それは他ならぬ健次である。

以下に示すのは、松井から見せられた数学の難問を解くことができた健吉が健次を試すという件である。

> 時には二人で数学の難問なぞを見つけて、競争的に解いたりする事もあつた。すると大抵私の方が早く考へついた。そんな時は何となく自信がついたやうな気がした。併し松井を標準にしてゐる安心が甚だ危険なものである事は私も知つてゐた。知つてゐながら、知らず識らずに私はその自信にすら驕つた。
>
> 或る時かう云ふ事があつた。松井が或る友達の処へ行つて、幾何の難問を一つ聞いて来た。それはその数学に得意な友人さへ、解き得ずに苦しんでゐたものだつた。
>
> 「どうだい。君も考へて見ないかい。是が出来れば数学の実力はもう大丈夫だぜ。」松井はかう云つて私を誘つた。彼のその顔には、私も大方出来ないだらうと云ふ、予期がありあり現はれてゐた。
>
> 「それぢや一つやつて見ようか。」私はさう云つて問題を取り上げた。なるほどどこから手を附けていゝか解らないやうな難問だつた。私は一人で自分の室へ来て、その午後中考へぬいた。勿論頭の重いのは癒つてゐなかつたので、久しく思考を費してゐると、とうとうボンヤリして了つた。そこでぶらりと

散歩に出た。それでも問題は頭にこびり附いてゐた。一と通り江戸川端を歩いて、水道端から小日向台へ上らうとした。その時寺へ帰る坂の途中で、ふとその解き方の端緒が浮んだ。自分は小躍りした。そして急いで室へ帰ると、新らしい作図を引いてやつてみた。やうやく解けた！ 私は急いで次の間にゐる松井に呼びかけた。

「おい出来たよ。やつと考へついた。」

「さうか。どうやるんだ。」松井は別に驚嘆もしないで、さう云ひながら入つて来た。

私は得意になつて説明してやつた。松井は「うむ、うむ」と云つて聞いてゐた。そして解き終つた時、

「成程なかなか面倒だね。」と云ひながら、まだよくは飲み込めてゐないらしく、作図をと見かう見してゐた。私の気持はいつになく晴れやかだつた。

その二三日後だつた。私は散歩の序に義兄の家に寄つた。弟は相変らずむつつりと、机の前に坐つてゐた。

「どうだ勉強は。盛んにやつてるかい。」私は訊ねてみた。

「えゝ。何だかこの頃は少しだれ気味で困ります。この間から一日十二時間励行の日課を立てたんですが、なかなか時間割通りに行かないんで、姉さんに笑はれました。精々やつて十時間ですね。」

「そんなにやれるものか。」私は少からず驚きながら反問した。

「だつて六時に起きて夜の十一時までやつて御覧なさい。飯と散歩の時間をぬいても、正味十五時間はあります。だから十二時間づつやれない訳はないんです。」

「それはさうだね。その間すつかり緊張してやれゝば大したものだ。」

「何しろもう十五時間づつやらなければ、凡ての学科を二回見るには間に合ひませんね。」

私は又弟の無意識なる圧迫を感じた。彼の机上には英語の本があつた。

「もう数学は済んだのかい。」

「えゝーと通り済みました。あとは試験前に、アンダーラインをして置いた問題だけ、ずつとやれば大丈夫だと思つてゐるんです。」

私は三度び驚いた。が、ほんとにそれだけの実力が弟にあるかどうかを試してみたくなつた。その時ふと二三日前の難問が頭に浮んだ。

「僕は二三日前にかう云ふ問題を聞いたがね。おまへに解るかい。」

私はかう云つて、問題を説明した。弟は黙つて聞いてゐた。そして別な紙へ自分で作図をすると、鉛筆の端で鼻の尖を無意識に叩きながら、遠い処を見るやうな眼をして、ぢつと一二分考へ込んだ。私は彼が出来ないのを望みながら、悪意を匿した微笑で待つてゐた。

二三分経つた。私はあくまで弟が匙を投げて、「この次迄に考へて見ませう。」とか何とか云ふだらうと多寡を括つて待つた。五分間ほど經つた。私はもうさりげなく、そこにあつたユニオンの四を、見るともなく翻してゐた。すると突然弟は鉛筆を忙しく動かし始めた。そして輝いた眼で静かに私の方を振り向いた。

「やつと思ひ附きました。形が変つてるんで解りませんでしたが、これは永澤の難問集に例題がありますね。あれの逆だつたのです。かうやればいゝんぢやありませんか。」

かう云つて彼は私に説明し出した。それは勿論私が考へたのと大差なかつた。がもつと簡明で直截だつた。私は内心少からず驚いた。自分が三四時間考へた処を、弟は五分ばかりで成し遂げた。私はふたゝび眼前の実例に圧倒された。

私はすつかり気落ちがして、弟のところから帰つた。

引用箇所では健次の学習プランが示されている。1 日に 12 時間も勉強をするなど非常識としか評しようがないが、当時は「四当五落」（睡眠時間が 4 時間なら合格し、5 時間なら落ちる）という言葉が受験界で言われ出す時期でもあるから、荒唐無稽とも言い難い側面がある。もちろん実際にそんなことができる受

験生はほぼいないし、現に健次もできていない（10 時間は勉強しているのだが）。

健次の難問の解き方も、いかにもといった向きがある。「永澤の難問集」がどのような問題集かを同定できなかったのだが、それをきちんと覚えていたから、それを逆にしただけで回答を導くことができたのである。数学なのだから、論理的に整合性が取れてさえいれば問題はないのだが、パターン化された形で回答を導くのである。

つまり、健次は当時の受験界にあっては、見本と称すべき優秀な受験生である。当時の受験雑誌の合格体験談をすべて重ね合わせた見本のような存在である。前号では主人公たちの微妙な出来の悪さが妙味と述べたが、それとは対照的な形で健次は描かれている。勉強時間は計画倒れだが、それはとてつもなく高度な水準での話である。むしろ、真面目一本槍なところが可愛くもあるとさえ評しうる。

戦後生徒会活動成立史の研究 ⑬
―「特別教育計画の組織と管理」以降（1）実践の動向―

猪股（いのまた） 大輝（だいき）（東京大学大学院）

前稿までの整理

前稿までの4回の連載では、1950年3月に文部省から発刊された『中学校・高等学校管理の手引』に収録された原稿「特別教育計画の組織と管理」について、そこに含まれていた生徒会論を分析してきた。

本稿では、同原稿の内容に代表される生徒会論の発展と、同時期の生徒会実践の関係性をいかに評価するか、という問題を取り扱いたい。議論の見取り図を先んじて示せば次のようになろう。本連載でも触れてきたように（例えばニューズレター59号の原稿）、1949年から50年にかけて相次いで発刊された文部省著作において繰り返し語られた「生徒会」論は、概ね、旧来の「自治会」的な生徒会像を批判し、学校管理の一部へ、教育的に望ましい形で生徒を参加させる「生徒会」へと転換する必要を唱えつつ、旧来と比してより精緻、かつ具体的な理論を展開したものであった。しかし、同時期の学校新聞の記述や先行研究などを確認すると、生徒会に関する理論が展開・発展していく一方、各学校における生徒会活動は、早くも停滞し形骸化していた様相が明らかになる[1]。

こうしたすれ違う側面―理論の転換、精緻化と実践の形骸化―との間の関係性について、先行研究には二通りの見方がとられている。すなわち、一方には、理論の「転換」こそが実践の形骸化を招いたとする見解があり、他方、理論の「転換」と実践の関係を一旦棚上げし、同時期、文部省著作だけではなく実践の現場にも見られた生徒会に関する議論の「精緻化」こそが逆説的に実践の形骸化を招いたとする見解がある。本稿は、こうした先行研究の議論をかいつまんで要約するものとなる。

まず、本稿では、理論の「転換」と実践の「形骸化」を結びつけて考える喜多明人の議論を確認する。続いて、これを批判しつつ理論の「精緻化」と実践の

「形骸化」を結びつけて考える冨岡勝の議論を確認する。なお、先行研究における議論に対する論者なりの評価は、本連載の最後のまとめで触れる予定であるので、本稿は以上のような議論の紹介に集中する。

自治会から生徒会へ～理論の転換と形骸化

本連載でも度々触れてきたとおり（例えばニューズレター第56号）、喜多明人は神奈川県内の中等学校を対象として、占領期の生徒自治会/生徒会の成立・展開の実態について研究している。喜多は、その研究の中で1949年以降の生徒会指導の転換についても報告している。喜多は、この変化について次のように述べる。

> 神奈川県下の高校生徒自治会も1949（昭和24年）～1950（昭和25年）にかけて転機をむかえる。〈中略〉とくに神奈川県の場合は、①「生徒大会」の最高議決機関性（直接民主制）に歯止めがかけられ、「生徒委員会」への権限移行など代議制（間接民主制）をとるよう勧告されたこと。② 生徒自治会の連合組織による「自治連合会」を解散すること、が求められたところに特徴がある[2]。

ここで、喜多が指摘する2点の変化は、概ねこれまで見てきた1949年以降の文部省著作における生徒会論と対応していると言えるだろう。すなわち、①の直接民主制から間接民主制組織への転換は、そのまま『新制中学校・高等学校望ましい運営の指針』などに見られた機構図の変化と対応しているし（ニューズレター第62号）、②の多校間の自治会による「自治連合会」の解散は、「特別教育計画の組織と管理」などにおいて、生徒会が学校管理の一部に対する参加組織として、学校内活動、及びカリキュラムの一環へと位置づけられたことと対応している。喜多もまた、以上のような対応関係を意識し、こうした「転機」の背景に

は「生徒自治会による学校参加の「行き過ぎ」を懸念した GHQ、文部省がブレーキをかけた」ことがあったことを指摘している。

では、以上のような指導上の「転機」を喜多はいかに評価しているか。この点について喜多は、極めてネガティブな評価を加えている。すなわち、喜多によれば、こうした指導上の「転機」と、その背景にある文部省の生徒会論こそが、日本における「生徒自治会の成長」を阻んだ当のもので、「戦後日本の学校において生徒の学校参加権行使が十分根付かなかった基本原因」[3]であると言うのだ。

ところで、こうした見方は喜多に限るものではない。例えば、占領期において特別教育活動に関する議論を多く残した宮坂哲文なども同様の見方を提示している。例えば、次のとおりである。

> もしも自治会という名称を廃して、校長の権限と教師の監督を強調した児童会、生徒会という新しい名称を提示することが、課外活動の教育的組織化としての特別教育活動の成立の1つのメルクマールであるなら、26年の特別教育活動は、一方で自治活動の教育課程化という教育課程の歴史の上での進歩的な意義をもつと同時に、他面において、当の自治活動を子どもたちの手から奪い取るという矛盾をみずからの内部に胚胎させていたといわなければならない。当時の、さらにはそれ以降の現場における特別教育活動の組織運営の形式主義的行詰りの実態はこの点を裏書きしているようにも考えられる[4]。

このように、宮坂もまた、「現場における特別教育活動の組織運営の形式主義的行詰り」の原因を、「26年の特別教育活動」すなわち、昭和26年の『学習指導要領（試案）一般編』における記述と、その記述と強力な関係を持つ1949年以降の文部省著作における生徒会論に求めていたのである。

生徒会の停滞は、理論上の転換が原因か

以上のように、文部省著作の理論的転換と生徒会ないし生徒の自治活動の停滞・形骸化を結びつける議論に対して、冨岡勝は、次の2つの疑問を提出する。すなわち、①「ほんとうに生徒会は成立当初から形骸化していたのか」、②「形骸化していたという面があったとしても、そうした形骸化の原因は活動範囲の制限だけにもっぱら求められるのだろうか」。こうした疑問点について、冨岡は、京都府の中等学校、特に「生徒会の成立過程に関する史料が他校に比べ多く残されている京都市立洛陽高等学校（現在は洛陽工業高等学校）およびその前身校である市立第一工業学校と市立洛陽工業高等学校」を対象とした実態史的研究を行い、検証を試みる[5]。

冨岡の結論の確認に移ろう。冨岡は以上の検証を通じて、①については、他の研究同様、設立当初からの形骸化という見方に「一応同意することができるだろう」とする一方、②については、依然疑問が残るとする。なぜなら、1949年以降の指導方針の転換によって、実際の京都市の学校において活動内容の制限等がおこなわれた形跡は「少なくとも表面上は見られなかった」ためで、ゆえに、「生徒会成立時における形骸化の主要な要因を校長による活動範囲の制限問題だけに求めることには無理がある」[6]とするのである。

冨岡は以上の指摘に続けて、検証の結果として、生徒会の「形骸化」の原因について、次のような見解を提示する。

> 生徒会成立時に役員選挙や議会制さらには三権分立などの民主主義的機構が整備された「にもかかわらず」生徒の関心が低くなって形骸化したのではなく、民主主義的機構だけが急速に整備されたこと自体が原因となって形骸化してしまった側面があったのではないだろうか[7]。

このように、冨岡は、理論上の転換が形骸化を招いたのではなく、文部省著作の生徒会論にも見られ、また同時期各地の学校で教師や生徒によって「精緻化」

されていた生徒会に関する議論こそが結果的に「形骸化」をまねいた可能性を指摘するのであった。

おわりに

本稿では、1949年以降の文部省著作における生徒会論と実際の生徒会活動の関係性について、異なる見解をとる研究のあらましを紹介してきた。以上のような議論は、冨岡がその論文の冒頭で述べる通り、「「どうしたら生徒会を充実させることができるか」という現在も問われ続けている問題に関する基礎的研究として」[8]位置づけられるだろう。なぜなら、本稿で紹介したすべての研究が認める通り、その成立当初から生徒会活動は形骸化の様相を示していたのであり、その原因を探ることは、現在においても依然活発とは言えない生徒会活動の現状に対して有効な視座を提供しうるからである。このように考えると、本稿で紹介した議論が提起する、生徒会に関する理論と実践の関係性に関する問いは、占領期の生徒会活動成立史の全体を考察する上で、一個の中心に位置づけられるべきものとなろう。ゆえに、この点に関する論者なりの応答は、本連載のまとめにおいて、再度論じることとしたい。

注

---

[1] 本稿で触れた喜多明人や冨岡勝の研究以外にも、例えば、都立九段高校の学校新聞をまとめた『戦後教育と高校新聞』（林伸郎・岡田真、1974年、東京美術）を見ると、1949年2月に発足した同校の「生徒会」は、同年12月発刊の学校新聞で早くも「自治会の無気概」や「中央委員会のダレ」、「生徒から全く遊離」と非難されていることを確認できる。

[2] 喜多明人（2015）『子どもの権利　一次世代につなぐ』エイデル研究所、235頁。

[3] 同前、221頁。

[4] 宮坂哲文(1968)『宮坂哲文著作集 第Ⅲ巻』明治図書、214頁。

[5] 冨岡勝(2005)「生徒会の発足」、小山静子・菅井凰展・山口和宏編『戦後公教育の成立－京都における中等教育』世織書房、217－244頁。引用は220－222頁。

[6] 同前、242頁。

[7] 同前。

[8] 同前、218頁。

「遠隔授業」準備メモ（3）

冨岡（とみおか） 勝（まさる）（近畿大学）

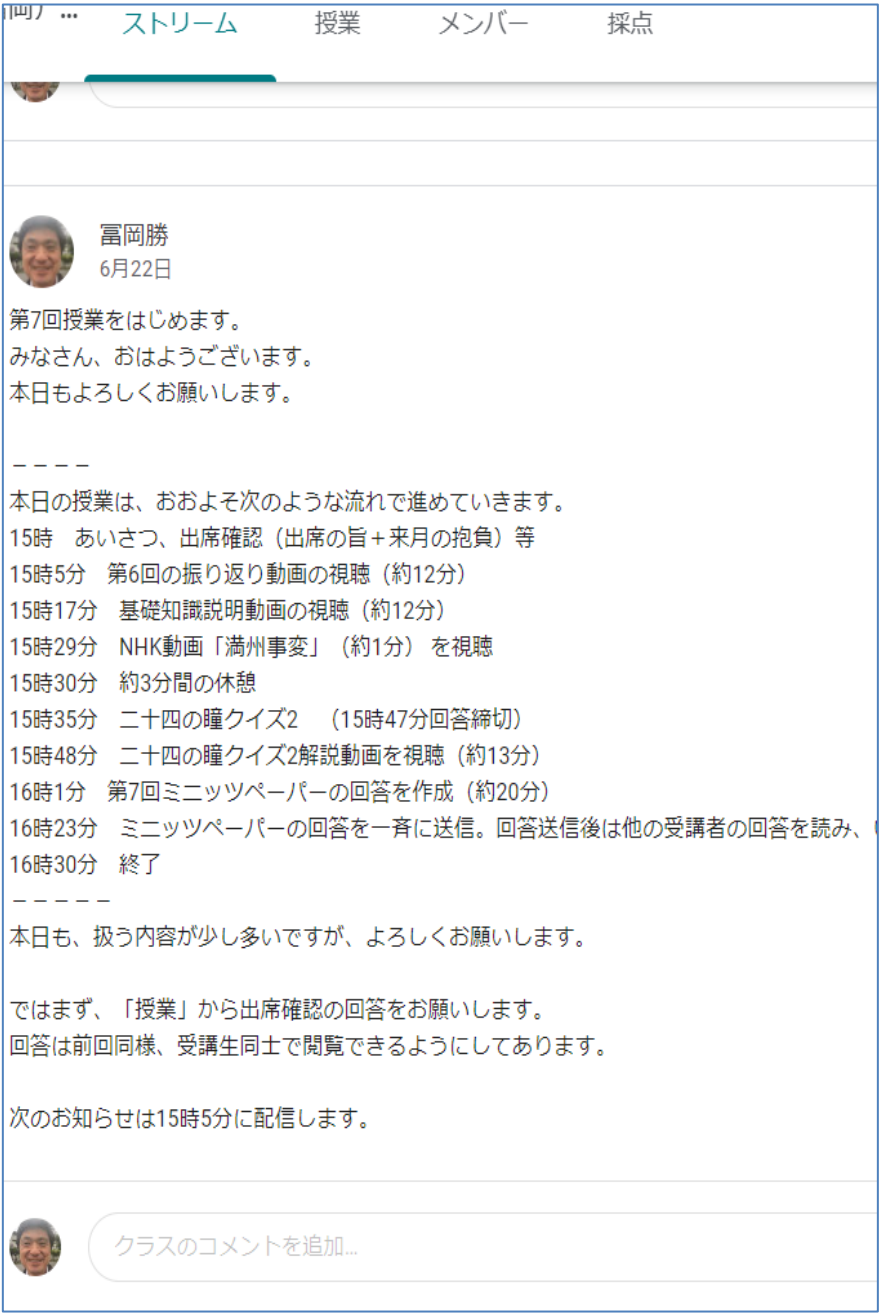
はじめに

第66号では筆者が実施した「遠隔授業」の報告として、非常勤講師として担当している大阪教育大学連合教職大学院で、slackを使って実施した「特別活動の展開」（全8回）について紹介した。

本号では本務校の近畿大学教職教育部で実施している授業について報告したい。

近畿大学の遠隔授業では、大学の共通方針により、GoogleClassroomを通して学生への連絡、教材配布、課題の集約などを行うことになった。そこで私も近畿大学での授業ではslackではなく、GoogleClassroomを使って授業を進めることにした。以下、GoogleClassroomをどのように利用したのかを紹介していきたい。

GoogleClassroomのトップ画面



（写真） GoogleClassroomの「ストリーム」

GoogleClassroomの「ストリーム」機能

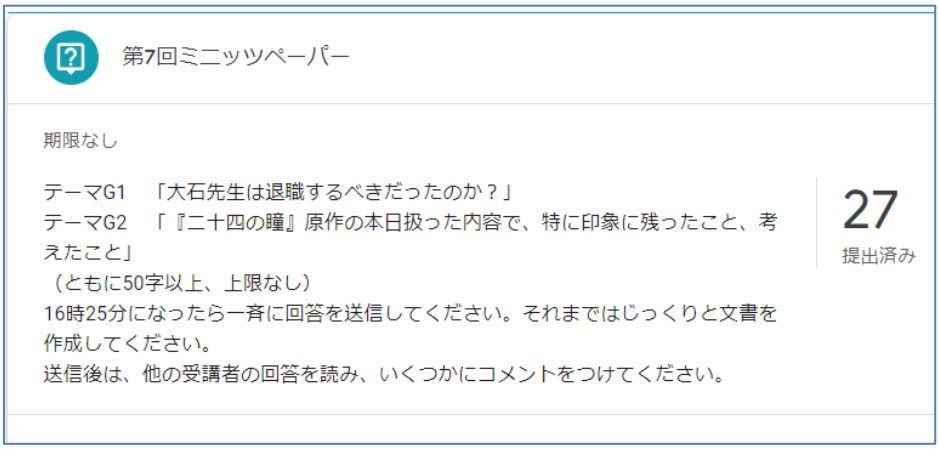
slackでは、授業のライブ感を出すために「今から前回の振り返り動画を見ましょう。どうぞ」といった具合の指示を授業中に頻繁に書き込んでいた。こうしたことは、GoogleClassroomの「ストリーム」機能を使ってひとまず実現できた。slack同様、実施済みの回の書き込みも、学生が閲覧可能な記録として残っているので、復習にも利用できる。また、「ストリーム」への投稿に対して学生や教員は「コメント」を付けることもできる。

GoogleClassroomの「授業」機能

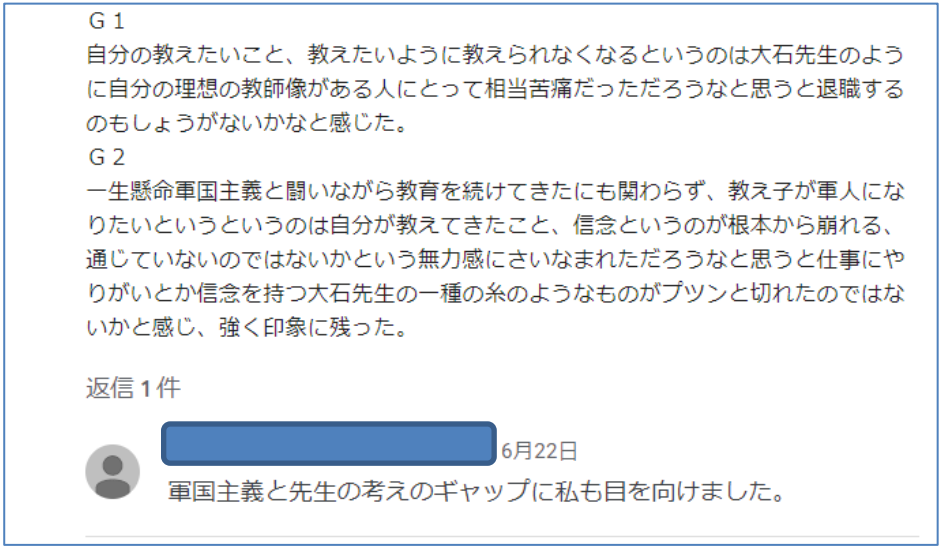
GoogleClassroomの「授業」機能には、説明動画やプリントなど教材の配布、簡単な回答を求める「質問」（出席確認やミニッツペーパーの回収も可能）、フォ

GoogleClassroom の「授業」にアップした教材や小課題の例

ーム形式の小テストやレポート回収が可能な「課題」といった機能がついていて、授業ごとに教材や小課題などをまとめて保存できる。この点はslackよりも便利である。



GoogleClassroomの「授業」にアップしたミニッツペーパーの例



ミニッツペーパーの回答に他の学生がコメントをつけている例

また、「質問」への回答を学生同士で閲覧してコメントをつける機能も用意されている。これを使えば、学生同士の意見交換も可能である。

このようにGoogleClassroomを活用することでslack同様、学生同士の意見交換を含めたリアルタイムの授業を行うことが可能になった。

また、教材や意見交換などの記録が学生にとってもわかりやすい形でGoogleClassroomに蓄積されていくので、通常の対面授業以上に学習の振り返りが容易となったといえる。つまり、授業を実施していくことがそのまま授業のアーカイヴズ構築につながるのである。この点は私にとって、遠隔授業で感じた新しい教育の可能性の一つである。

ただし、遠隔授業を行っていく上で、教材面で困難を感じた点があった。それは、これまでの授業では、録りためてきたテレビ番組の録画や映画を教材としてしばしば利用してきたが、授業用の限定公開であっても番組の録画をドライブにアップするのは著作権上の問題があると思われるからである。映画ももちろん同様の問題がある。とくに「教育の思想と歴史B」（教育史を中心とした内容）では、録画や映画を使うことが多かったので、どうしたものか、と頭をひねることになった。次号では、その対処について報告したい。

『久徴館』のめざすもの（4）

小宮山（こみやま） 道夫（みちお）（広島大学）

前号に掲載した赤座の「久徴館ノ維持ヲ論ス」について見てみよう。

赤座はまず久徴館の経営資金として、有志者や館主の拠金、あるいは一部の者の才覚によって維持することはそれほど難しいことではないが、「縣下人材ノ養成」という館の主旨を維持することの方が難しいと述べる。人材の養成は放任では不可能で、久徴館があるだけでは何の意味もなく、久徴館は「人材ヲ養成スルノ館ナリ」というのである。

ではその養成を誰が担うのか。館長は規則上では判断のつかない事案を裁断する役割、取締は規則を運用する役割、規則は館生の行動を規制はするが心を縛っているわけではない。委員は「人才養育」を議することはなく、かといって「館生ノ集合カ」も「館生ハ大抵県人ニシテ別ニ異ナル原素ヲ見」ない同類の集まりのため「他塾舎ニ劣リタリトモ優リタリト称エヘカラ」ざる状況だと分析している。「然ラハ誰レカ之ヲ養成スル乎、苟クモ之レヲ養成スルノモノナケレハ久徴館ハ久徴館ニアラスシテ、一種ノ県下書生ノ集合場タルニ過キサルナリ」と何とも心許ないばかりである。そして現状ではやむを得ず「恰カモ徳育ノ教師ト其父兄ノ義務ノ代理者トヲ兼帯スルモノヽ如ク務メ」ているのが「取締」であり、「取締ノ義心ナケレハ久徴館ノ破滅スルヤ久シ」という状況だったと述べている。

しかしその一方で、「此館ニ法律政治文学ノ志願者アリ理学工学医学ノ志願者アリ兵学ノ志願者アリ農業商業ノ志願者アリ宗教算数教育学ノ志願者アリ」と述べ、それぞれがそれぞれの得意とする有益な情報を提供し、「育英社社員ハ久徴館ヲ見ル事我家ノ如ク館生ヲ見ル事恰カモ其子弟ノ如ク」することで「初メテ人材ヲ養成スルノ久徴館」となることができると述べる。

「毎年一ニノ宴会ニ頭ヲ出シ酒ヲ飲ミ肴ヲ食ヒ一ニノ演説ヲ聞キ孰レカ館生カ孰レカ館外生カヲ区別セサル而已ナラス現在館生ノ数モ知ラスシテ帰家スル者ヲ以テ稍々熱心ナル社員ト為スカ如キ形状ナルトキハ何ヲ以テ人才ヲ養成ス

ルコトヲ得ン哉」とはおそらく実態を示した言葉ではかなろうか。このような久徴館における風紀の乱れもこの寄稿の発端の一つであったことだろう。

「沼田悟郎氏等ノ有志者ハ何如ナル感情ヨリシテ久徴館ノ無用ヲ認メ之ヲ一ノ学校ニ変スルノ請願ヲ出セシヤ余輩甚タ怪シムニ堪ヘサルナリ」とあの一文は興味深い。ここで出てくる沼田悟郎は加賀金沢藩家老津田玄蕃家の家臣沼田采江（1851～1912年）のことで、師範学校や中学校の校長を長く務めた人物である。1869(明治2)年に主人玄蕃の東京遊学に随行、翌年帰藩し中学東校の訓導となったが翌年同校が廃校となったために上京して慶應義塾に学んだ。帰郷した後は1874年(明治7)年に開校した師範学校の幹事となり、1876年開校の石川県啓明学校幹事、同校改組後の石川県中学師範学校（1881年石川県専門学校と改称、1887年第四高等中学校に発展的解消される）の教諭を経て、1880(明治13)年から同校校長兼教諭を務めた人物である。その後1884年に石川県五等属を経て文部省五等属となり、1887年には岐阜県尋常中学校校長を務めた。1892(明治25)年から2年間は郷里に戻り石川県立工業学校校長を務めたが、以後三重県立師範学校、山口県立中学校、千葉県立中学校の各校長を務め、退職後は東京市役所や内閣賞勲局で務めるなど石川県を離れている（丸山信編『人物書誌大系30 福沢諭吉門下』日外アソシエーツ、1995年3月、62頁参照）。

この記事の書かれた時期には沼田は岐阜県にいたはずであり、彼が何を主張しその運動にどのように関わっていたのかは明らかにはできない。しかし、少なくとも久徴館を新たな学校組織に変革することを主張し主導する立場だったことは間違いないであろう。沼田ら改革派は現在の久徴館を「県下人材管理養育ノ場」と見なして、「県下人才管理養育ハ諸氏天下ノ害ナリト信スル」立場であったと赤座は見なしている。そしてそうであるならばなぜ久徴館の廃止を訴えるのと同じように「県下ノ高等中学ヲ廃止スル事ヲ請願セサルヤ」と疑問を呈している。ここでは高等中学校は「人材の管理養育」であり「天下ノ害」と見なされているようである。それに続く文章は恨み節に近いが、要は久徴館を有為な人材育

成組織として維持するために具体的に7つの規則を実現したいとの意思表明である。第一条では「育英社々中ヨリ十五人或ハ三十人ノ委員ヲ選挙シ毎月一回或ハ二回久徴館ニ当直セ氏ムル事」とあり、おそらく社員と館生との交流を期したものと思われる。その社員は「法理文医工兵商農ノ七部ニ分」け各部2名ほどが月に1回か2回久徴館に当直して最新の情報共有を図るということなのであろう（第二条）。久徴館同窓会雑誌を改編するか新たな雑誌を創刊して館生の情報を提供し（第三条）、館生の娯楽環境を強化し（第四条）、毎週1回の談話会を催す（第五条）という改革案である。さらには虫の良い話であるが、社員の所属組織の「器物等ノ縦覧」の便宜を図り、「無給ニ病者ヲ診察シ」、「訴訟ヲ鑑定シ」、「教授」すべし（第六条）としている。そして館生一人に三人以上の忠告者をつけ（第七条）、いわば護送船団方式で館生を教導しようという腹づもりのようである。至れり尽くせりとも言えるし、見ようによってはこれこそが管理養育に陥るのではないだろうか。赤座はこの点どう考えていたのであろうか不思議である。

ちなみに沼田らの請願がどうなったかといえば、前号第6号の「記事」欄に次のように記載があった。「育英社幹事会　兼てより有志者数名が久徴館を借り受け同館今日の組織を改めて一つの学校となさんことを育英社へ願ひ出でられしが去る十四日開会の育英社幹事会に於て該願書を返却することに決せられしと」（『久徴館同窓会雑誌』第6号、1888年12月、33頁）。おそらく前年12月14日のことだが、育英社幹事会で否決されたようである。新設計画の学校がどの様なものであったか興味のあるとことであるが、現時点では明らかにはできない。

（続く）

体験的文献紹介(15)

― 拙著『東京における漢学塾の実態』の執筆をめぐって ―

神辺（かんべ） 靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

1961年の春から東京都政史料館に通って「明治五年・開学願書」を閲覧しはじめたことは前に記した（本シリーズ65号）。63年の暮の頃、私学教育研究所所長の原田実先生から『日本私学史・明治初期の研究』を出版するから春までに原稿を出すように言われた。2年にわたって夏休みと冬休みを殆んど全部をつぶして筆写した「明治五年・開学願書」である。これを書こうと即座に決めた。

「開学願書」というのは〝私塾や私立学校を開く場合は必ず所轄庁に届出、許可を受けろ〟という明治3年12月の太政官布告からはじまったもので広義に言えば現在の私立学校設置願にまでつながるものである。

明治5年3月、「学制」公布を目前にした文部省は府県に管轄内の私塾に開学願書を提出させるよう命じた。この命令は直ちに府県庁を通じて全国の区戸長に配られたので各府県庁に私塾の開業願書が集った。東京府についてみれば明治4年11月以降、5年9月までに106通の願書が集った。東京府はそれ以前から独自の調査のため、府内私塾の開塾願書を提出させていた。それが明治4年5月末日までに130通になっていた。そこで都政史料館は、文部省の命令で提出させた106通の願書とそれ以前、東京府の意図で集めた130通の願書を合わせて「明治五年開学願書」と一括し、保管することにしたのである。私が研究対象とする「明治五年開学願書」はこの236通の開学願書をさすのである。

個人が人に教えるのに官公庁に願いを出さなければならないというのはまことに希有（けう）なことである。よって、この236通の願書の中には私学願書と認めがたいものが混入している。3通の教育建白書である。この建白書についてはあらためて別に記すが、本稿ではこれを抜きとる。また、いかなるわけか名古屋に開地学校という学校をたてたい〔とい ?〕う開学願書が数通混じっている。おそらく旧名古屋藩士が東京の旧尾張藩邸で計画をたて東京府庁に願書を出したので

あろう。廃藩置県、「学制」公布直後のことだから諸事混沌(こんとん)としていたのであろう。このように未見の一次史料をつかって論文を書くことは若い研究者にとって胸の高まる仕事であるが一次史料というものは、こちらが望むように整理されていない。雑然としているものである。その当時の、その場所の状況をよく調べねば、雑然の意味もその史料の価値もわからない。また研究者自身が、いまなにを知りたいかという確たる研究テーマとその道筋を自覚していなければならない。私は不惑を目の前にした自分の未熟さをいやというほど味わったのである。

いかなるわけか、同じ願書を数回出している者もあるし、旧幕時代の横須賀造船所で仕事を習ったという記録もある。このような夾雑(きょうざつ)史料を抜いて私塾と認められるものを抜き出したら93通になった。ついでながら「私塾」という学術用語は江戸時代にはない。福澤諭吉が〝一身独立〟の文脈のなかで〝私(個人)が独立〟と言ったのに端を発して新聞や文部省が〝私立〟〝私塾〟の語を流行(はや)らせたのである。

さて、私塾と認められる93通の開学願書を学科別に分類すると、漢学塾27,英学塾16、医学塾6、ドイツ学塾3,フランス学塾2,書道塾2、国学塾1,舎密学(化学)塾1で、別に合科塾31、学科不明4に分類できた。合科塾とは私が仮に名づけたもので、国学と漢学または漢学と英学、または数学を併学するという私塾である。大勢(たいせい)として漢学と英学と数学がこの時期の東京の学問であった。数学はつい数年前まで算盤(そろばん)はじく和算で、洋学といえばオランダ学であった。それが明治4、5年には洋算学と英語が流行(はや)り出す東京の変化の早さに驚く。

以上の調査分析で93私塾を研究の対象とすることが決ったので論文題を「東京における漢学塾の実態 ―明治五年開学願書を中心として―」と目次をたてた。

序論

本論1.私塾の大勢

2.塾主の履歴

3. 開塾の時期と場所

4. 学習法と教科書

5. 塾規と学生

結論

資料編

「1. 私塾の大勢」は、これまで書いた私塾の状況を表示しながら解説し、「2. 塾主の履歴」は「開学願書」をもとに、竹林貫一『漢学者伝記集成』や小林司気太・小川貫道『漢学者伝記及著述集覧』で補った。問題は「3. 開塾の時期と場所」「4. 学習法と教科書」「5. 塾規と学生」である。「開学願書」は私塾の位置を「第一大区第十二小区岩本町附属地」というように戸籍区大区小区制によっている。一方、『漢学者伝記集成』は江戸期以来の旧町名によっている。明治11年7月に「郡区町村編制法」が公布された時、東京府は大区小区制を改め15区6郡に区画を改正した。この時、町名を旧に復したものもあって、大区小区制の塾の位置はさっぱりわからない。そこで大枚をはたいて古書店で『東京府史全10巻』を買い求めた。『東京府政』は「行政編6巻」「府会編4巻」で、この場合は「行政編第5巻教育」だけがほしかったが、古書店が端本は売らないというので、いつか役立つだろうと思って涙を飲んで購入した。後にわかったことだが、都政史料館はすでに『都政紀要5・区制沿革』（昭和33年刊）を公刊しており、これに拠ればすむことだった。しかし『東京府史全10巻』はこの後の研究に大変役立った。

「4. 学習法と教科書」は本論文のハイライトである。「開学願書」には「学則」という項目があり、そこに「口授（くじゅ）」「質問」「輪講」「会読」とか「素読書目」として「孝経、史記、文章軌範、左伝、近思録、礼記、春秋」等が並べられている。これら書物はたいがい知っていたが、これらの書をどのような順序で、いかなるやり方で読ませたのであろうか。当時、刊行されたばかりの石川謙博士の大著『日本学校史の研究』（昭和35年刊）を見たら漢学学習の素読から読書に至る一般

的やり方がわかり易く説かれてあった。しかし「開学願書」にある学習法は多様である。さらにくわしく知りたかった。想い出したのが武田勘治先生である。先生は後に『近世日本学習方法の研究』（1969年・講談社）を刊行されるが、当時、この原稿を書いている最中でその蘊蓄（うんちく）を語られていた。そこで私は武田先生に〝東京の漢学塾の雑多な教授法を記述するに当って基準になる教授法が近世にあるか〟と質問した。武田先生は即座に江村北海の『授業編』と佐藤一斎の『初学課業次第』をあげられた。ともに『日本教育文庫学校編』にあるという。私はこの二書を漢学塾学習法の基準として多岐にわたる東京の漢学塾学習法の変化を跡づけた。

「5．塾規と学生」は『日本及日本人』の昭和13年4月号が〝明治の漢学塾〟を特輯しているので、これと東京の漢学塾の塾規とつき合わせて叙述した。

私学教育研究所の『紀要第7集・日本私学史・明治初期の研究』は1964年4月、発行された。私学史研究会の武田勘治・名倉英三郎・稲垣友美諸氏の論文と並んで神辺の「東京における漢学塾の実態」「明治初期における私学人の抵抗」「明治初期・私塾の新聞広告」の3論文が掲載されている。この紀要は石川謙先生の所へ送られたのであろう。〝石川謙氏が「東京における漢学塾の実態」はよい論文だとほめていたぞ〟と武田先生から言われた。点数の辛い尾形先生からは電話があって〝だいぶ腕があがったな〟とほめ言葉を貰った。嬉しかった。日本教育史研究者の一員になれた気持だった。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

都内にてステイ・ホームを続けているなかで、『神奈川大学史紀要』第5号（2020年）所収の、齊藤研也さん（神奈川大学資料編纂室）が執筆・翻刻紹介されている、神奈川大学に卒業生のご遺族から寄贈を受けたという日記に関する論考「神奈川大学資料編纂室蔵〈『北村久吉日記』（昭和17年2月1日～6月21日）〉」を拝読しました。戦時下の横浜専門学校の卒業生となった北村久吉さんの日記全文については、ぜひ読者諸氏にも同上紀要にて、直接ご覧いただければと思います。齊藤さんの論考を全体的に読んでみて、近年充実され始めている大学アーカイヴズの存在が、いかに大学史編纂、大学史研究の進展・発展にも寄与し得る可能性を有するのかについても率直に予感できました。
https://kanagawa-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13032&item_no=1&page_id=13&block_id=21

『北村日記』を紀要にて翻刻する理由について、齊藤さんは3つの点を挙げ、「一つ目。限られた横浜専門学校期の資料に少しでも厚みを持たせ、その歴史を明らかにする糸口を見出したいからである。二つ目。この日記には戦時下の状況はもちろんのこと、しかしそれだけではなく時代の様々な様相が記されているからである。三つ目。日記だからこそ現れる個人の思いや気質などを残したいと考えるからである」と指摘しています（29～30頁）。さらに、齊藤さんは日記から当時の在学生らの内面を分析することも有効だとして、「内面を探ることができれば、たとえば大学生、高等学校生とは異なる専門学校生像を見ることもできようし、横浜専門学校における教育の実態を考える際の助けともなろう。…その作業には北村だけでなく他の学生との比較が必要であり、それがうかがえる資料の発掘も行なわなければならない」と述べています。なおむすびにおいて、齊藤さんは「歴史は人の営みの集積である。人の営みを記したものが日記であるから、間違いなく日記は歴史の資料に成り得る。これまで述べてきた通り、埋もれていた横浜専門学校の歴史に対する示唆、時代の記録だけではなく時代を重層的に見る手がかり、貴重な当時の学生の心のうちなどを書き留めた『北村久吉日記』は翻刻に値するのである」と、重ねてその意義を強調しています（40頁）。日記という資料の価値、意味付けを明瞭に説明されています。

また同じ頃ですが、久留島浩さん（国立歴史民俗博物館）が執筆された論考「歴史系博物館の可能性」（『博物館と文化財の危機』2020年所収）も刺激的に読みました。久留島さんは、現状に対する危機について、「かつては、多く存在していた『地域の歴史家』

（郷土史家）の世代交代がうまく進まないなか、地方の大学がそうした人材を育てるだけの専門的な教員を減らして、その教育力を低下させ、小・中・高校の教員も大学院で日本史の修士論文を書くことができなくなるなかで、学校の行事や生徒指導に追われて学校がある地域社会についての『研究』（教えるための基礎的な研究）でさえできなくなりつつ（そうした時間も能力も失いつつ）ある」（53頁）と訴えながらも、博物館の主要な役割は「地域の自然環境と歴史・文化に関する、地域社会で共有すべき『記憶』や記録、たとえば、文献資料・人びとの記憶（ことばや共通の経験・動作でしか継承できないもの）・生活や生産に関わる『もの』（道具や日用品）・建物や景観など」（51頁）の歴史資料の把握と保存であると挙げ、行政や大学も協力連携して、その担い手となる人材の育成につとめるべきだと主張しています。詰まるところは、やはり人が肝要だということでしょう。（谷本）

岩波新書編集部のウェブサイト「B面の岩波新書」で、今年4月から藤原辰史「パンデミックを生きる指針――歴史研究のアプローチ」という論考が無料公開されている。
https://www.iwanamishinsho80.com/post/pandemic
この論考は、「1　起こりうる事態を冷徹に考える」「2　国に希望を託せるか」「3　家庭に希望を託せるか」「4　スペイン風邪と新型コロナウイルス」「5　スペイン風邪の教訓」「6　クリオの審判」の6節で構成されている。

「想像力と言葉しか道具を持たない文系研究者は、新型コロナウイルスのワクチンも製造できないし、治療薬も開発できない。そんな職種の人間にできることは限られている。しかし小さくはない。たとえば、歴史研究者は、発見した史料を自分や出版社や国家にとって都合のよい解釈や大きな希望の物語に落とし込む心的傾向を捨てる能力を持っている。」という著者の見解には賛成であり、私自身そうありたいと考える。

この藤原氏の文章は上記サイトで無料公開されているだけでなく、朗読もオーディオブックサービスの「audiobook」で無料公開されている（利用者登録は必要）。
https://audiobook.jp/audiobook/257648

有料の出版事業、印税で生活する作家・ライター、書店との共存も必要だが、こうしたテキストと朗読の無料公開は、情報共有の新しい可能性を提起していると感じた。（冨岡）

会員消息

6月下旬、NHKニュースの発表によれば、昭和戦時下にマレー半島の戦地で戦っていた父親に宛てた当時の高等女学生の手紙が、戦後時を経てこのたび、渋谷区の郷土博物館に受け入れられ、一般公開されることになったといいます。手紙は、オーストラリアの女性が父親の遺品のなかからみつけ、これは日本側へぜひ返したいと、当時の女学生の居住地域にあたる東京都渋谷区に寄贈されたものだそうです。

https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kodomo/gakushu/bunka/tenrankaishousai.html#18

同月、放送文化の向上に貢献した番組や個人・団体を表彰する第57回ギャラクシー賞のテレビ部門特別賞に、テレビアニメ「ゲゲゲの鬼太郎」（第6期）が選ばれました。アニメ作品が、特別賞を受賞するのは初めてだそうです。ちょうど、同作品シリーズの第20話「妖花の記憶」でも、お盆の頃になると鬼太郎の友人である女の子の親戚のうちで綺麗に咲くという花のルーツなどを求めて、鬼太郎や女の子らは遠く南洋諸島まで出向きます。その地域は、戦時下の激戦地で邦人を含め、当時多くの人たちが亡くなった事実を知ることになります。そして現地で綺麗に咲く花たちに守られていたかのような遺跡のなかから、偶然にも女の子の親戚の許婚が日本に居る愛すべき女性に宛てた、届かなかった手紙を発見します。戦後75年以上を経てなお、人の思い、人への想いが、しっかり我われにもうかがえます。（谷本）

『戦没学徒　林尹夫日記［完全版］』（三人社、7月刊行）を注文しました。『わがいのち月明に燃ゆ』（ちくま文庫）は、何度も繰り返し読んだ記録があります。「第二次世界大戦末期に学徒出陣した青年が、死を目前にした内面を率直につづった遺稿ノートなどが、立命館大国際平和ミュージアム（京都市北区）に保管されていた。23歳で戦死した京都大生、林尹夫（ただお）（1922～45年）が書いたノートで、50年前に一部が書籍として刊行されたものの、未刊部分が多く、その中身は長く確認されてこなかった。」（『毎日新聞』2017年2月2日）。原文そのままの完全版です。（山本剛）

久方ぶりの会員消息となってしまい、大変申し訳ございません。私事でありますが、6月より早稲田大学大学史資料センターで非常勤嘱託として勤務させていただいております。勤務を始めてからもうすぐ2ヶ月となりますが、同僚の田中さんには大変お世話になっております。現在のような状況では何かを始めるのも難しい状態となっておりますので、新しい仕事には積極的に取り組んでいきたいと思います。（雨宮）

緊急事態宣言解除後も、長らく職員の在宅勤務を継続していた我が社ですが、7月6日より通常勤務が再開しました。在宅中も仕事はしていましたが、やはり出勤して同僚らと相談しながら進める仕事は、能率も密度も違います。仕事以外でも、同僚と一緒にランチしたり雑談したりと、一人で在宅勤務していた時には味わえなかった楽しみも戻ってきました。そしてこのたび、その同僚の一人に雨宮会員が加わってくれました。頼もしい新人に期待しつつ、あたりまえの日常が戻ってきたことに感謝しつつ、日々を過ごしています。

（田中智子）

今年75年目の節目を迎える原爆の日だが、コロナ禍の影響でかなりの規模の縮小や行事の中止がなされている。動もすれば例年にないしめやかな日となるかも知れないし、かえってそのことでイベントではない本来の慰霊行事に変貌する良い機会になるのかも知れない。広島平和記念式典の時間帯は一般の入場規制が行われる。一般の参拝は午前5時から7時までの2時間。頑張って早起きをして今年も祈りを捧げられればと思う。

（小宮山）

私の研究上の恩人の一人である元神戸高校教諭の永田實さんがご病気で亡くなられたという知らせを受けました。永田先生は『神戸高校百年史』（1998年）の編集の中心を担われ、刊行後も中等教育史をライフワークとされました。全国各地の高校年史関係・中等教育史研究関係の人脈をお持ちでした。退職後も校史記念室および校史編纂室の資料の充実につとめられ、収集された全国の高等学校の沿革史は1000冊を超えています。沿革史コレクションのリストは以下の URL で公開されています。

https://www.hyogo-c.ed.jp/~kobe-hs/data/koushi/enkakushi.pdf

永田さんの主要な研究として次のようなものが刊行されています。

「『平生釟三郎日記』にみる神戸の旧制中等学校」（『歴史と神戸』53巻2号、2014年）

「兵庫県立神戸高校所蔵の絵葉書(約8,500枚)」（『兵庫地理』56号、2011年、宗 敦夫氏との共著論文）

「兵庫県立神戸高校における「百年史」の編纂体制」（学校沿革史研究会編『学校沿革史の研究総説』野間教育研究所、2008年所収）

旧制高等学校記念館の夏期教育セミナーでも平生釟三郎日記に関する研究発表をされました。

旧制の神戸一中の史料を分析する研究会で神戸高校を訪問したときに初めてお目にかかったのが15年以上前で、以後10回以上、神戸高校に伺って史料を閲覧させてもら

いました。夕方になると、中華料理店で大盛りの餃子とビールを楽しみながら神戸高校をめぐるお話をたくさん伺ったのも楽しい思い出です。まだまだ研究交流ができると思って楽しみにしていましたので、本当に残念です。有り難うございました。（冨岡）

WEB サイト「全国子ども考古学教室」がグラウンドオープンしました（資料１）。筆者も少し制作のお手伝いをさせていただきました。ご覧いただけますと幸いです。

WEB サイト URL ： https://kids-kouko.com/

（資料１）「全国子ども考古学教室」WEB サイトの画面

（以下、宣伝用フライヤーより引用）

WEB サイト【全国子ども考古学教室】は、初めて歴史を学ぶ小学6年生を対象にした学習支援サイトです。考古学の楽しさや魅力を伝えるために、考古学の基礎知識をはじめ、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代をそれぞれ解説し、全国 47 都道府県の特徴と出土したお宝、遺跡 670 か所を紹介しています。文章は考古学の専門家が執筆し、教育関係者が小学生にもわかるようにリライトしたもので、自主学習や自由研究、授業の教材としてご活用いただけます。このサイトを通じて、子どもたちが地域の遺跡や考古学、歴史に興味を持ってくれることを願っています。（八田）

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。